

今日のみ言葉 226 「キリストの言葉を住ませる」 2013. 4. 10

キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住ませ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。(コロサイ 3の16)

Let the word of Christ dwell in you richly with all wisdom;
teaching and advising one another in psalms and hymns and spiritual songs,
singing with grace in your hearts to the Lord.

私たちの内に、何を住ませるべきなのか、このようなことはキリスト教に触れるまでは考えたことはなかった。私たちの内には何かが住んでいる。たいていの場合それは、自分自身である。何をすることも考えるにも、まず自分中心に考えるからである。あるいは、部分的に、他人が住んでいるともいえよう。他の人がどのように思うだろうかなどといつも考えている場合がそれである。他人中心といっても、他人にとってどのようにすることが一番よいのか、といったようにはあまり考えないことが多い。

目には見えないものこそ最も大切なのだと知らされると、その見えざる良きものが私たちの内に住んでいるのかどうか、それは決定的に重要なことになる。

神は、人間とははるかに離れた遠くにいる存在であって、人間のこの小さく、しかも汚れた心に住むなど考えられないことであつた。それが、キリストが私たちの罪を担って十字架で死なれたのちに復活し、聖霊となって存在されるようになってからは、心から求めるものには、そのキリストが私たちの内に住んで下さるといふ大きな恵みが与えられるようになった。

内に住んでくださる活けるキリストが、各人に語りかけられるという状態こそ、私たちの最終的なあり方だといえる。キリストが内に住んでおられるなら、そのキリストの言葉も私たちの内につねに住んでいることになる。

そして、そうした内なるキリストの語りかけがまだ、十分には聞こえてこない場合でも、すでにキリストが語られた言葉は聖書に記されており、そのみ言葉を心に留め、住ませることはできる。キリストの言葉は生きており、それはおのずから他者にも働きかけるので、互いに教えあうということが可能となる。

キリストを信じる人たち同士の互いのはたらきがしばしば言われる。互いに重荷を負いなさい(ガラテヤ 6:2)、互いに愛しあえ(Ⅰヨハネ 4:11)、互いに仕えあえ(Ⅰペテロ 4:10)等々。

キリストの言葉が豊かに住んでくださるかどうかによって私たちの日々が決定され、またその生涯も決まる。

礼拝のときの感話—聖書の言葉のメッセージで感じたこと、心にとどまったことなどを短く語ることで、互いに教えあうということが少しではあるがなされる。祈りも代表の人が一人祈るのでなく、複数の人たちが祈ることで互いに祈りあうということがより実現できる。

こうした状況のなかで、賛美の重要性がここで言われている。キリストの言葉が内に住んでいるなら、悪の力から守られる。そしてそのキリストの言葉が賛美へと向かわせる。賛美の源泉は神の言葉であり、キリストの言葉だからである。



(伊吹山の中腹から山頂を見る)

この青色の美しい花は、トラノオと呼ばれるいくつかの花のなかでは、ことに希少なもので、日本では、伊吹山にしか見られないとのこと。右に並べた伊吹山の頂上の付近に咲いているものです。この山は、標高1377m、車などなかった時代一何千年の間、人々はこの山には何時間もかけてふもとから歩いて登らねばならなかったのも、またいつも仕事があったわけだから、このような山の頂上まで、たいていの人にとって、とてもそのような1日がかかりで登ることなどできなかつたと思われます。

そうしたほとんど人のいない山頂部において、いつの頃からかだれも分からないけれど、はるかな昔一数千年、あるいはもっと昔からこのような美しい花が咲き始めたのです。何者がこのような花を置いたのか、と問いたくなるような花です。それはまさに神ご自身が 御計画によってこの山の頂上部の一角に置かれたのだと感じます。

昔から、強い風雨や厳しい寒さにさらされる山頂付近で人知れず咲き続けていたこの花、人間の世界にも、この花のような人を神は必要に応じて造り、必要なところに置かれてきたのを思います。

なお、その花穂（かすい）が長く、トラの尾のようだということから、トラノオ（虎の尾）という名を持つ野草としては、イブキトラノオ、オカトラノオ、ヌマトラノオ、そして、園芸種のカクトラノオなどあり、いずれも長い穂のような花をつけます。

ここにあげたルリトラノオは、その瑠璃色の花ゆえに、それらのトラノオのなかで、最も美しいものといえます。イブキトラノオは、見いだされたときに 伊吹山に多いと思われたために、この名が付いていますが、各地で見られ、私が初めて見たのも、徳島の剣山近くの山（標高1700mほど）でした。

ルリトラノオの青い美しい色やその姿が、ほかの花とはまた異なるものを見るものに語りかけてきます。何を語っているのか、それは人間の言葉でなく、神の国の言葉であり、心を開いて見るものには、それぞれにちがったメッセージを語りかけてくると思われます。

青い色、それは地上でもっとも広大な大空や海原の色です。それは常に人間の目に入るものを最も清々しい色にされた神の摂理だと思われます。

主イエスは、「野の花」を見よ、と言われます。それは何も意識や目的も持っていないはずの植物が、神の光に照らされるとき、そこから人の言葉でない霊的な言葉を語りかけてくるものになってきます。（文・写真ともT. YOSHIMURA）

